

「どうする家康」と「生意気なことを言わない生徒たち」

今年のNHK大河ドラマ「どうする家康」は、「情けない家康」の成長が主題のようですが、これまで徳川家康は、天下統一のために狡猾な政治手腕を発揮する「ずる賢いタヌキ親父」として描かれることが多かった。そのあたりを松潤がどのように演じていくのかを楽しみにしている視聴者も多いのではないのでしょうか。

家康を主人公にした大河ドラマは1983年以来だそうです。その時の原作は山岡荘八の「徳川家康」（何と！全26巻で、世界最長小説でギネスブックに認定されたこともあるらしい）。この本は日本のみならず、韓国や中国でもベストセラーとなり、ビジネス書としても多くの経営者に読まれたそうですが、経営の神様と言われた松下幸之助氏は読まなかったとのこと。その理由は物語が長かったせいではありません。氏は著書「社員稼業」の中で、面白いからと薦められたら読んだかも知れないが、経営に大いに役立つと薦められたから読まなかったと述べています。「あいつはうまくやった。おれもあのとおりやろう、と思ったら、なかなかうまくいきません」「それではなんでも自分でやったらいいのかというと、私はそうは思わない。（中略）聞くようであって聞かない。聞かないようであって聞く、というのが私のやり方です」とも言っていますが、この加減が難しい。ただ考えてみると、教育にも似たところがあります。ある程度までは平均的に（一斉に）教えないといけないのですが、どこかの段階から「言うこと」や「やらせること」を変えていかなければいけません。個性に合わないといけないわけですし、個性を伸ばさないといけないわけです。それがどの段階なのかの見極めが、やはり難しいわけです。

実のところ、私は先生による「一方的な講義」のような授業も大切だと考えています。つまり、よその誰かの考え方をそのまま受け止めることも意義深いと思っています。それは、他者の考え方も、生徒たちの血となり肉となると考えているからです。モーツァルトの父親は息子にミヒャエル・ハイドンの曲を模範としてよく練習させ、モーツァルト自身も作曲の際にハイドンから「盗作」「借用」したと言われています。天才モーツァルトも模倣からはじまったわけです。

ここ数年、先生方の授業を見ていると、「生徒たちが自分たちの意見を言い合う」「生徒たちが教え合う」場面が多いことに気づきます。そのことは大事だと思いますが、その一方で、回答が一つでないことを前提に、先生自身も自らの考え方をはっきり述べるべきだとも考えます。そうして述べられた考え方はやはり生徒の血や肉になると思いますし、何より、「自分の意見を表明できる生徒」を育てるためには、時には父親が、母親が、あるいは先生が、しっかりと自分の考え方を話して聞かせる、そういう姿勢を示すことが大切だと考えます。いろいろな考えは認め合わないといけません、大人たちが自らの考えをしっかりと述べる姿勢を示さないと、子どもたちは「批判される不安」や「空気を読む感覚」ばかりが大きくなり、いつまでも発言や議論は苦手のまま、そして、「独自の見解」（あえて言葉を選ばないなら、「ちょっと生意気なこと」と言い換えたいです、あくまでも「ちょっと」ですが）を言えない大人になってしまうように思います。

さて、今回のしめの言葉は「空気は読むものでなく吸うものだ」です。今年度はこれでおしまい。それでは次年度に。

令和5年3月2日

大村城南高等学校長 中小路尚也